

平成十六年十月一日発行 第十四巻第十号 通巻第一六〇号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成16年10月号



# 十王詣

高橋将夫

炎帝が真上にあぐらかいてをる  
夏の月そこにゐるのはどなたかな  
天窓や氷室の闇の消えてゆく  
涼風のかよふへだたりなりしかな

窟より涼しき風のきたりけり  
夕風のごとくに妻とゐたりけり  
十葉を母の花とぞ思ひをり  
道草を食うて十王詣かな  
藁しべをくはへてゐたる瑠璃蜥蜴  
三伏のライフマスクと仏頭と  
大日の影の真夏となりけり

南　　へ

天野きく江

南　へ　南　へ　と　来　し　羽　抜　鳥  
したしくて父の家なり梯梧かな  
くろしをの端に海月の骨ひかる  
晩夏光波に融けては打ち返る  
船虫を追ひし少年はたと消ゆ  
船虫のやさしき顔と出逢ひけり  
炎昼のナデシコ貝を探しをり  
八月の大濤なりし撫でられし  
サーフアーは竜宮の門垣間見し  
ハイビスカス無縁仏は淋しからず

特別作品

ときめきのむかしありたる施餓鬼かな  
無口にて海亀の子は旅立つか  
はらからや月の出潮はあかあかと  
白南風に学舎跡の土肥ゆる  
あこ<sup>多武峰二句</sup>う樹の影に入り来し大揚羽  
まどろみに耳はありける不如帰  
風にあて芭蕉の花の蜜を吸う  
我知らず踏み込みみるたる虹の端  
朴訥のこつて牛ブーゲンビレアかな  
月の家我島人となりぬたる

# 槐安集

市場基巳

幹に背を擦りゐる牛も螢どき  
川の暮れ手もとにおよぶ螢待つ  
斑猫のはたりと飛ばず日暮れぬる  
雀来てつついてゐるよ黒毛虫  
霧ふかく筒鳥こもる音と知れ

水野恒彦

天心の乾きて龍舌蘭の花  
梵唄の響みなりけり泥鰌鍋  
炎天に犀の鼓動を感じをり  
蟻塚や海のひかりは斜めより  
海牛構ひてゐたる夜の秋

石脇みはる

水中に入りたる墓の食はれけり  
雨の日の青瓢箪の肌かな  
うどんげの躰るまで見てゐたりけり  
一息に頸拭ひけり天の川  
星とんで兎と亀のアツプリケ

竹内悦子

山牛蒡槐山房にゆく途中  
赤鉛筆削つてゐたる土用かな  
篋を斜かひにゆく单足袋  
白桃のつるりと剥けし禿かな  
骨壺やまだ青くして石榴の実



木下野生

西方になほ日のありて夏料理  
くちなはをつついてゐたり夏の棒  
人通りけり噴水の向う側  
ソーダ水極楽絵見てきたばかり  
大雨にうたれてゐたり花火屑

中島陽華

帰省子の笑ひ声あげ鸚鵡かな  
短夜のやまんば狼のこゑ忘れ  
豆狸<sup>ままだ</sup>出て泣く子笑ふ子夏祭  
海ゆゆし玫瑰の花そこここに  
しほくじらエツフェル塔の花火かな

延広禎一

夜の秋やうやう土の睡りかな  
鮎の宿夕日の中の風土記かな  
夏の月壺より出でしエイリアン  
はつたいに噎せ床の間の黒船図  
祭髪搔きあげ鯛の筏盛

栗栖恵通子

塩もみのま青に夕立来たりけり  
こんちきち胸に卍の伊達鹿の子  
とんがつてをる滝垢離の耳ふたつ  
生れたての闇が来てをり合飲の花  
盆波の白し修善寺物語

加藤みき

ふくふくと白曼荼羅華の闇のあり  
ぎすのこゑ海風にのり来りけり  
雲の峰風紋に足跡あまた  
黄蜀葵の花のか暗きところかな  
日盛りの朽葉の湿り神の庭

大島翠木

苦瓜や五鉈杵を握るやうにして  
天の川声明闇を波立たせ  
しやつくりの止みし餓鬼忌の朝なりき  
花氷腹のあたりを撫でてゐる  
安曇野美術館  
碌山に眼置いて来し大暑かな

雨村敏子

この池に鱗たまごみつけし半夏かな  
白蛇見し夜の睡りの深きこと  
冬瓜におもての顔のありにける  
百億の星億万の草の露  
大壺の底の暗がり月夜茸





# 槐市集

秋岡朝子

消えてゆく私の影なり揚羽蝶  
ビールジョッキの中の幸せ水中花  
下駄はいてみな手に団扇六本木  
赤き鼻はずしピエロの涼しき顔  
広島菜の絵のぬれてをり蟬しぐれ

天野きく江

蟬生まる夜は馥郁と匂ひけり  
水切つて笑ふ容の鯨髭  
遠雷や絹糸の箱構ひをり  
幻日やこきこき歩く青鷺ぞ  
たたなずく青垣にして大暑かな

岩月優美子

瀑布もて神山いよよ極みたり  
三伏や樟の根岩を掴みたる  
切支丹灯笼ひそと露涼し  
苔清水太古の匂ひ掬ひたる  
湯舟より星の零るる夜の秋

岩下芳子

富士近きホテルを出でて夏薊  
日盛の鉄がぐにやつとなりけり  
大蟻の蹟いてゐる穴のあり  
曼荼羅の間に坐しをり庭涼し  
緑蔭の象がワルツを踊りけり



# 槐集

## 高橋将夫選

炎昼のわれはからつぽ迎へ水 枚方

中野 京子

朝からの暑さ遠目をしたる犬 香川

黒田 咲子

天地を塗りかへてをりはたた神  
少年の網の鱗粉雲の峰

七月の葉ずれふたたび睡魔くる  
さざなみに酔ひたる土用太郎かな  
竹涼し人の火照りのちかぢかと

蟬の羽化見てゐる子らのしじまかな  
ひまはりや真白き闇に父と母

鶺鴒の首の潮目を抜けてきたりしよ  
瑠璃蜥蜴死す天地の乾きぬて

岡崎

近藤 喜子

枚方

谷口佳世子

夜は赤き星の生まるる土用かな

山の神水の神あり桃の仁

大蟻の一匹だけで動く夜

大阿闍梨ひとつぶの汗流されし

絶海の紺の線り出す夏の雲

短夜のみぢかき足を伸ばしけり

砂こぼれ易き手の平晩夏光

月山へまつすぐに行く夏帽子

梵唄に日のひろがれる茄子の花

本多 俊子

夏果の肉桂の樹にふれてをり

夏の犀笑ふほかなし笑ふかな

千頭の鹿の軸なり土用東風

神と鬼どくだみの香にひそみゐる

小面に咲きしばかりの沙羅の花

天界は遠しががんぼ足長し

水無月の岩窟くぐる靈気かな

雲の峰蓬萊橋の木の匂ふ

なぞなぞのいつしか途絶え夏の月

谷村 幸子

# 銀河往来 高橋将夫

〓人の句、自分の句 〓

◇「特別作品」や「チャレンジコーナー」を拝見して、いつも思うことがある。それは大抵の場合、月例の投句作品より良い句がそろっているということである。「特別作品」で、力の入れ方が違うから当然と言われればそれまでだが、それにしても特作では月例の投句の他に二十句が加わるのだから大変だと思う。それでも作品がそろうのは、どういうことだろうか。いろいろ考えた結果、次のような結論に達した。簡単なことである。皆さんにそれだけの力があるから、それだけの作品が出てきたのである。換言すれば、皆さんはまだまだ余力と可能性をもっているということ。それが、そのまま「槐」の余力と可能性を物語っていると思うと、誠に心強い限りである。

◇「人の句のことはよく分かるのだが」という言葉を時たま耳にする。自選の難しさをよく物語っている。見渡す限り波ばかりの大海原で舟が潮に流されている。その舟の上では、自分がどちらへ、どんな速度で移動しているかを知ることはできない。舟は潮と共に流れ、動きは感じられない。舟の動きを知るには、ヘリコプターにでも乗って、舟を離れるしかない。俳句でも自分の外に出て、冷静、客観的に自分の句を見ることができたら、よく分かるのだろう。しかし、問題はそれだけではない。誰もが自分なりの俳句観、基準を持っている。他人の句がよく分かるというのは、実は、他人の句はこの基準に照らすことが容易だということだけのことである。自分の句の場合は、その俳句観、

基準自体の位置と方向を自らに問わねばならないところに難しさがある。その積み重ねを通じて、自らの俳句観、基準を確かなものとしてゆくことが大切と言えよう。

◇「槐集」観照

炎昼のわれはからつぽ迎へ水

中野 京子

今年の猛暑がストリートに表現されている。しかし、本当に怖いのは次の二句：〈蟬の羽化見てゐる子らのしじまかな〉〈ひまわりや真白き闇に父と母〉。

炎帝の腕かたひろげし中にある

近藤 喜子

これまた、大胆な表現。そして、本当に怖いのは次の二句〈夜は赤き星の生まるる土用かな〉〈大蟻の一匹だけで動く夜〉。

梵唄ぼんばいに日のひろがれる茄子の花

本多 俊子

声明と茄子の花のやすらぎ。一転、〈神と鬼とくだみの香にひそみゐる〉〈天界は遠しががんば足長し〉である。このギャップが何ともいえない。

竹涼し人の火照りのちかちかと

黒田 咲子

かぐや姫に誰かがいいよつてでもいるのか。涼しいからこそ、火照りが気になるところ。

大阿闍梨ひとつぶの汗流されし

谷口佳世子

大阿闍梨といえども汗はかく。「ひとつぶの汗」を見て取ったところが感動。